

横濱叢書第四輯



横濱郷土史研究会

## はじめに

本書は、横濱叢書第四輯「舌栗毛 保土ヶ谷めぐり」（昭和八年・横濱郷土史研究会刊）の写本です。

「保土ヶ谷めぐり」は、保土ヶ谷の郷土史について書かれた諸本の中でも最も簡潔で分かり易く、わずかな時間で保土ヶ谷の歴史や伝承が一読できるたいへん重宝な本と言えましょう。しかしながらこの本の存在はあまり知られていません。また原本は印刷が古く活字も小さく極めて読みにくい体裁となっています。そこで「保土ヶ谷めぐり」がより多くの区民に読まれ、郷土の歴史に対する関心がいつそう深まることを期待して写本を作成しました。

写本作成にあたり、

漢字はできる限り常用漢字に改めました。

旧仮名遣いを新仮名遣いに改めました。

読みやすくするため一部ふりがなを付けました。

題字や文中の写真はそのまま複写しました。

退色の著しい表紙の版画絵（広重）は別途複写しました。

巻末の参考資料や年表は省略しました。

平成十三年二月二十三日

（PDF版制作 平成十八年二月十日）

写本編集者 飯塚 充

# 目次

保土ヶ谷区の現勢	5	大仙寺	16
史の変遷	5	外川神社	17
古代	6	道祖神	18
奈良平安朝	6	一里塚	19
榛谷御厨	7	街道並木	19
榛谷氏～北條氏～徳川氏	7	樹源寺	20
保土ヶ谷宿	7	権太坂	21
見付	7	留女	21
橘樹神社	8	境木	21
浅間寶寺	9	地藏堂	22
帷子橋	9	お鍋稻荷	23
帷子川	9	八幡神社	24
神明社縁起	10	菊水観音	24
香象院	11	福聚寺	24
見光寺	11	杉山神社(西久保町)	24
天徳院	12	御所台の井戸	25
大蓮寺	12	北向地藏	25
桜ヶ丘	13	大日本麦酒	25
遍照寺	14	法性寺	26
今井川	14	杉山神社(星川)	26
中之橋	14	正福院	27
刈部清兵衛悦甫	14	高根大権現	28
台場	15	釜檀山	24
問屋場	15	杉山社(上星川)	28
金沢鎌倉道	15	東光寺	29
其爪	15	正観寺	29
本陣	16	眞福寺	30

たたりげ ほんごのたたり

太郎冠者、次郎冠者旅のよそおひして

これは此のあたりに住む太郎冠者と「次郎冠者でござる。  
今日は頼うた御方、いやこころよう御許されたによつて、  
「兩人これより保土ヶ谷一見に出でばやと存ずる。」いか  
に次郎冠者、息杖の代りとする竹の葉の滴りを忘れまい  
ぞ、「支度がよくばさあ出かけようぞ、「さあ」

「さあ

道引

濡れてほす山路の菊の露のまに

千年のいのち延ぶるなる、秋はことさら面白そう、  
野坂を越えてもみちする、昔をしのぶよすがぞと、  
とり〜語る道すがら、はや保土ヶ谷に着きにけり、  
はや保土ヶ谷につきにけり。

## 舌栗毛 保土ヶ谷めぐり

(太郎冠者と次郎冠者道中間答)

太郎冠者 「昔の道中のように水盃もなければ脚絆草鞋も不必要、千里一瞬の間に往来するのも昭和聖代のありがたさだ。さあ洪福寺前、電車停留所だ、下りよう。初めから文句をいうのじゃないが、保土ヶ谷区には電車線路は一つもない」

次郎冠者 「昔ならさしずめ保土ヶ谷宿領分の入口、即ち見付へ来たことになるんだね。そこで太郎冠者、これから保土ヶ谷一見と出掛ける前に、現勢を知って置く必要がある。それを一寸説明して貰いたいね」

太 「今の保土ヶ谷区の広さは、東西一里三町三十間（四・三〇六km）南北二十六町十二間（二・八三二km）周囲が六里三十二町（二七・〇二三km）で面積が一・二三方里（一八・九七一平方km）だ。横浜市全面積が八六八方里（一三三・八六七平方km）あるから比率一割四分に当り、即ち五区中の第四位となるわけだ。位置は誰も知ってる通り、市の西部を占めて北は都筑郡新治村と神奈川区へ、東は神奈川区と中区に連り、西は都筑郡二俣川村及都岡村に、南は中区と鎌倉郡川上村に接する、ところなるのだ」

次 「成るほど。序でに一寸此の区の史的変遷を聞きたいね」

太 「尤もな註文だが、詳しく言つてると日が暮れる。今流行の大スピードで話そう。四百五十年程以前は小田原の北条早雲の所領であった。徳川氏の世になってからは其の直轄地となって明治維新を迎えた。徳川家康が東海道の往還を開いてから、慶長六年には伝馬の継宿となり、慶安元年には街道を大体現今のように定めた。此の地は榛ヶ谷御厨庄に属して、旧本陣輕部三郎氏の家に残る慶長十四年の水帳に此の名称が載つてる筈だ。明治四年神奈川県の管轄、六年の区制制定で第二大区第一小区に編入、十一年の郡区町村編成には横浜区の管内にあった岡野新

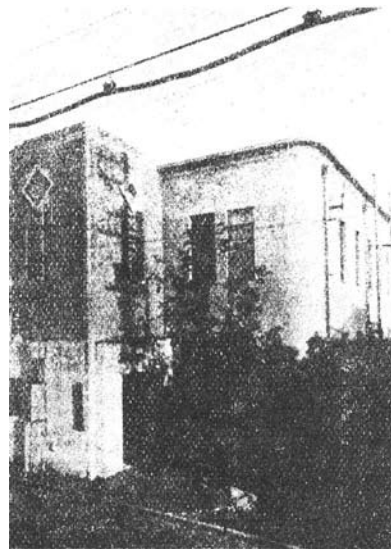
田を編入、保土ヶ谷四ヶ岡野新田組合と改称して橘樹郡たちばなぐんに属した。明治二十二年（一八八九）が市町村制実施の時、保土ヶ谷区と更められて新たに宮川・矢崎の二ヶ村合併、保土ヶ谷町外二ヶ村組合となった。三十四年（一九〇一）に岡野新田は横浜市に編入、四十二年（一九〇九）には組合を廃して保土ヶ谷町と改称、四十四年今井川以東、岩間町の一部を横浜市に編入、昭和二年四月一日に横浜の隣接二町七ヶ村が合併されて、ここに都筑郡西谷村と一緒に市の仲間入をし、此の年の十月一日区制施行で旧町の区域を十三ヶ町に、旧西谷村の区域を二ヶ町に区画して今の保土ヶ谷区となったのだ。いわれといっぱ、まづ此の通り」

次「芝居掛りで来たね。

もう少し昔のことを聞きたいもんだ、僕も一番富樫左衛門尉とがしさえもんじょうを氣取って、事のついでに問い申さんとゆくかね」

太「妙な声を出しちゃあいけない人が笑うよ。

この保土ヶ谷の地が



保土ヶ谷区役所

太古未開の頃から早く開けて、所謂原住民族がこのあたりの山野を駆け廻っていたことは確かで、今日でも出る沢山の石器や土器が立派に之を証拠立てている。その後日本武尊をはじめとして度々の東征で、この辺りにも皇化が沾い文化の曙光が照って、大和民族の移住が追々と増して来たのである。ずっと下つて奈良朝から平安朝時代にかけては、例の地方制度の整備、交通の発達、其の他文化的諸設備の発達で、此の地方の往来も相当に頻繁ひんぱんになつて来た。和名鈔わみょうしやうにある幡屋郷はたのやごうは、恐らくはこの保土ヶ谷辺りを含む地であつたろうと思える。交通の便はよし、五穀は豊穰、住民は敬神の念が厚い、三拍子揃つた此の地が伊勢大神宮の

御領として寄進せられるようになったのも当然の事であったのだ。これが世に榛谷御厨と称えられるもので、この御厨から毎年白布三十疋が神宮に献ぜられたのだ。神戸の神明社はその時に建立された誠に由緒深い宮であるのだよ。それから頼朝の鎌倉時代となって此の地は榛谷氏の支配となり、榛谷氏が没落してから可成りの変転はあったが、南北朝時代には西園寺家の所領となつてゐる。更に下つて室町時代になると、記録がはっきり分かる様になつて来た。永祿年間(二五五八―六七)の小田原北條分限帳に保土ヶ谷の地名が出て来る。此の事から磯貝正君が、保土ヶ谷の地名が幡谷の郷名から榛谷の庄名となり、やがてそれが保土ヶ谷という地名が生まれたんだろうと、本年の春保土ヶ谷区役所で史談会があつた時大いに頑張つて居たつけ。僕も此の点には賛意を表するよ。それから天正(一九七)十八年徳川家康が関東に封を移してからの事は前に云つた通りだ。まあ保土ヶ谷の史的概観といえばこんなもんだ」

次「よく分かつた、いわれを聞けばありがたやだが、昔の保土ヶ谷は宿屋が七十幾軒があつて、上り下りの客や馬、非常に賑やかなもんだつたことは名所図会の絵や版画などで見てもよく想像される。今から考えるとまるで夢のようだね」

太「ちようど君と僕とを昔にかえした弥次北の膝栗毛にも、程ヶ谷の情調が表われている。二人が宿へかかると留女が大勢出て来て沢山の客を引張る。そこで弥次が

お泊まりはよい程ヶ谷ととめ女、戸塚までは離さざりけり  
などと洒落てるじゃないか」

次「さあそろそろ歩きながら話そう。天王町の方へ向かつて行こうか。昔の見付は今の天王町三九五番地の所にあつた。宿役人などが此見付で大名や高貴な方々を迎えたというからね夢だね。見付から少々来たばかりで此の賑やかなことは驚くね。通りも広いし町並も美しいかにも保土ヶ谷銀座といわれるだけある」

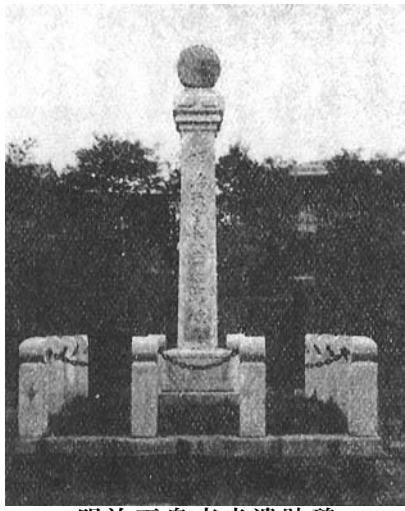
太「町が繁昌するとすぐ何々銀座と来る。俺はあれは嫌いだ。歴史的に見ても無風流だろ。しかし銀座が無かったとしても銀貨を落とす処だらまあ勘弁はしてやる」

次「あは、は、は。昔は田浦で蛙が泳ぐ天然プールだったのが、富士紡が出現したお陰で、忽ちこうした繁華の地と変ったのだ。あの突当りが富士紡保土ヶ谷工場、男女三千百三十七人を使うというから凄いなあ。元の海道へ戻って十数間来ると左側に鎮守の橘樹神社がある、石鳥居を潜って参拝しよう」

太「御社は震災後の造営だが実に立派だ。区内第一の壮麗だろう。祭神は素盞鳴尊、次郎冠者此のお社のいわれを知っているか」

次「能弁比類無き太郎冠者のことなれば、拙に代わってお願ひ申す」

太「へんに賞めるなよ。文治二年京都の祇園社から分霊を勧請、往古は



明治天皇東幸遺跡碑

宮ヶ坂という処に在ったのを万治三年海道の開通と同時に即ちこの地に遷座し奉る。以来帷子宿の鎮守として崇敬日に月に加わったが、火の禍あつてむざんや焼失、天保十三年時の代官関保右衛門、名主の刈部清兵衛以下に謀つて相州大山の木工棟梁八十八代手中明王太郎忠部敏景に命じて再興した。その時の費用一千二百両とある。この記念碑を見給え。昭和七年九月の建立だが、これは明治天皇御奠都の砌、内侍所奉安殿を造営せられた世にも尊い聖蹟なのだ。これを記念した碑石だよ」

次「尊い遺蹟だ。さて此の宮の御神体が川から上がったという伝説もあるというね」



太「ある。もと仏向村の淺間寶寺に鎮座したというが、度々戦で寺が破却され、神体は帷子川へ飛入つて穢れた時をお忍びになる。流れ流れて此の川岸へ着いたのを、御託宣あつて取揚げて祀つたということだ。其の因縁から神上り田の小字もあるのだ」

次「神体が上がつて神上がり田の説明もさる事ながら、僕は此の神へ捧げる新穀、即ち供米を作る神田だろうと考えるね。どうだろう」

太「恐らくそれが真実だろうよ。それから神体の正面に向うと神像から烈しい光がさして拜まれない、強いて拜もうとすると打倒れる、それほど荒神なのだ。そこで後向に安置されたなどは全く類の無い話だろう。始め三人の百姓が拾いあげた因縁で、宮の立替えや其の外の場合には此の三人の子孫が式を行う事に極めてあるということだ」

次「荒神だね。もし外の者がやると打倒されるだろうね。さあこれが帷子橋か。江戸名所図会以来のお馴染だけに姿形は変わつてもどうも懐かしいね」

太「太田持資の歌に

日ざかりは片肌ぬぎて旅人の、汗水になる帷子の里

道興准后は廻國雜記の中で

いつ来てか旅の衣をかへてまし、風うら寒き帷子の里

と詠んでいる。又、澤庵禪師は

地白なる霜のあしたはいかならん、夏ぞきて見む帷子の里

と諷詠した。其おもしろいやりがいいね」

次「俺ならばこうやる。

帷子のうすきものさへ無き我も、ほどがやすいと廻る世の中」

太「つまらない洒落は止し給え。此の帷子川は都筑郡の白根辺りから出て横浜駅附近で海に入るが、昔の川身は曲がりくねつて流れた為に、沿岸に田畑を持つ百姓は毎年のように水害を蒙つた、そこで川普請を歎願して享保十六年に川幅を拡げると同時に、川身を真直ぐに改修したの

で一時は水害を被らなかつたけれど、天明年間には押し流されて出る山土砂の為に河床が埋まり、享保以前と同じ状態になったので又々歎願騒ぎだ。時の代官伊奈半左衛門が察知して官費で以て河床の浚渫をやつたからずつと水の暴れるのも止まつたという事だ」

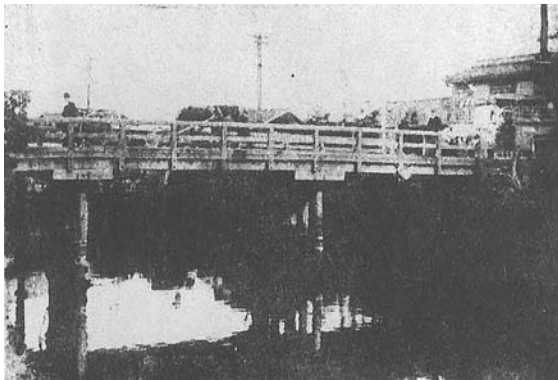
次「して見るとなかなか手数の掛つた川だね。橋を渡つて左に見えるのは、あれが保土ヶ谷区役所だ」

太「右へ出て星川町へ通ずる道路を行こう。約一町程先にほら老杉鬱蒼と見えるところがあるだろう。あれが神戸の神明社だ。これは頗る古い歴史のある社で、天文二十四年の縁起に天禄元年伊勢大神宮が武州御厨膳谷の峯に影向あり、それから川井へ又二俣川へと遷座、更に下保土ヶ谷宮林なる地に移つたので

八坂に祀つたが、嘉禄元年に神託あつて今の神戸に神明の下宮を建て、別当寺を満願寺と名づけた云々とあるから、少々混雑はしているが兎も角歴史が古くて昔から信仰の厚かつた事が分る。今の社殿は明治天皇御東行の御時、軽部清兵衛宅内に鳳輦奉置所を造営せられたその材料を、此社の修繕料にと下賜せられたとある。この一時でも注意する価値がある」



神戸の神明社



帷子橋

次「一拝して元来たところへ戻ると、神社から鳥居に向って右方の民家のある辺りが即ち満願寺の跡と聞いた」

太「うんその通り。もう真言宗香象院の前へ来た。創立は年代不明とあるが、天正十一年忠秀法印が中興したというから相当に古い。今回の展覧会に出品されてる鎌倉時代の紺地金泥の大殿若経五百六十の巻が発見されて呼物の一つになってるから見落とさぬようにしよう。明治以前は今の浅間町の浅間社の別当寺で、境内に神輿蔵などもあった。袖磨山富士の人穴由来を記した浅間神社の縁起もここから出したものだ。本尊不動明王は慈覚大師の作という。境内を一廻すると清墨庵先生の墓をはじめいろいろ感慨深い碑石がある。こういうところは隙さえあれば屹度見廻るべきものだ」

次「垣一重を隔てて寺があるね。あれは」

太「浄土宗の見光寺だ。墓地には横浜地名案内の著者森田友昇の墓がある。此寺は寛永六年の創削、此の宿の茂平夫妻が江戸深川の靈巖寺珂山上人の許にあつて剃髪して名を道意、貞壽と改め、上人から授けられた弥陀像を今の地に安置して千日千夜の修行、満願の夜に此の像から白昼の如き光明が放されたという。これを珂山上人に告げると因縁のある土地らしい、一寺を建立すべしというので遂に一字を建て珂山院見光寺と名づけた。いい名ではないか」

次「時々仏像から白昼の如き光明の出る伝説があるが、どうも昔の像には蓄電池でもあつたらしいな」

太「莫迦なことを言うもんじゃやない。信仰が深くなると俗人の眼には映らぬ光明までが見えるものだ」

次「成る程な、此の辺りは寺が多いな、見光寺の裏手山際にもあれ高く瓦が聳えて見える、あれも寺だろう」

太「曹洞宗の神戸山天徳院だ。天正元年に保土ヶ谷の豪族小野筑後守が華林榮公和尚に帰依して建立した寺だ。維新前は神明社の別当寺をも兼ね

たこともあつた。見給え大きいだろう、だから今日では保土ヶ谷区内第一の伽藍となつている。什宝の中に地獄の有様を刻んだのがあるが、幾代前かの住職の手に成つたとかで何れ寺の事だから彼岸会の時などは盛んに勧善懲悪に用いられたであろう。本尊は地藏菩薩、その腹籠として一寸八分の雲慶作の地藏尊が納められる、これこそ小野筑後守の甲の中にあつたものでしような、戦場での功名もこの像に拠るといふので古くから崇敬が厚かつたという。面白いね」

次「地藏といえは温和な仏に考えられるがね、尤も勝軍地藏というのもあるからな。僕は又此の地藏尊がどういふものか餅を好かぬという伝説を聞いている。寺で餅を搗くと必ず住持が死ぬといふのはちと分からね話ではないか。ある和僧が禁を破つて餅を搗くとその夜のうちに頓死した。困つた本尊だね」

太「此の寺のすぐ後の高台にも寺があるよ。日蓮宗の妙栄山大蓮寺といつてね、山門の下に日蓮上人帷子里霊場の標を建ててある。上人が二十一歳で鎌倉へ遊学の時、途中である民家に泊まると其の子供が釈迦の像を玩具のようにして遊んでいる。そこで諄々と説聞かせて日蓮宗に改めさせ、其の像を持って出立した。あとで此の家が法華の道場となつたが、宗祖第一の帷子里宿泊場というのでこうした標を建てるようになったのだ」

次「昔の行者は到る処でそんな風に実践したものと見えるな、殊に日蓮はああした強気の僧だつたからね」

太「それからね、紀州南龍公の生母養珠院おまんの方がこの寺に詣つた時、宗祖の本像を寄進したり、庭に拓榴を植えたりして公の成長を祈られた、この木はもう枯死して今は若芽が生じて相当のものになって居る。また檀中から寄進した明珍作の甲冑は、寺には似合しくもないが稀に見る逸物、確かに寺宝として他へ自慢する価値はあるう。門前から天徳院前を過ぎて土橋へ行く迄の辺りを古町というが、万治以前の東海道の道筋

だったからこんな名が残るのだ」

次「寺の門前から僅に登ると広い坂路で、ああこれだ桜ヶ丘という高台は。やあいかにも桜が多いな。花の頃は横浜一の桜の名所というが、こうして紅葉するさまは又花よりも美しい。霜葉二月の花よりも紅なりというのは此の事だろう。それに寺を潜つて桜の名所だから一層気持ち清々する。そこで一首

嬉しさも悲しみも皆くくりぬけ

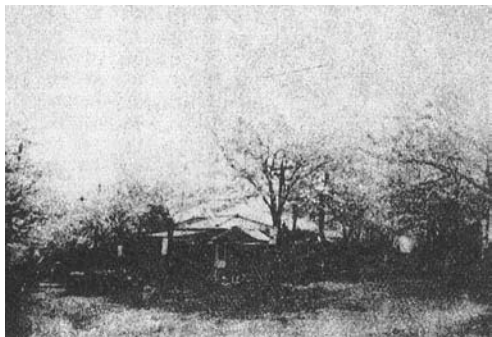
花と紅葉の丘にたたずむ

太「あつさりと気持ちよさそうだね。住宅が沢山並んでる、見給え市立実科女学校を囲んでの桜、それから通路の両側がトンネルになつて高台に来る人の顔が皆桜の色になろうという

名所だ」

次「それに芳香も頼に上るだろうしね」

太「勿論の事だ。それからあすこに見えるのが浴風会の横浜分園だよ。浴風会というのは恩賜金をはじめ各宮殿下の御下賜金を基として、扶養者の無い六十歳以上の者や、不具廃疾者を收容する処だ。高台で空気はよし、春は花、海も見えれば富士も眺められる、こんなよい処で余生を送る事が出来るとは、ほんとうに有り難い事だなあ」



桜ヶ丘

次「僕も其の内厄介になるかなあー」

太「心細い事を云い給うな。社会事業といえ、保土ヶ谷には中々沢山あるよ。不良少年を收容する自彊舎もあれば、肺疾病者を容れる市立療養院もある。其の外、」

次「いやだいやだもう止めてくれ、だんだん滅入つて了う。お寺の方がい

くから良いか知れないサア歩こう」

太「よし、又お寺に行くのだよ、ほら坂の登り口左に真言宗の  
医王山遍照寺があるよ」

次「ちや又お寺か。さらばいわれを聞き申そうか」

太「そう改まっちゃ困る。貞観十八年に真雅僧正の開創というから古い  
だろう。本尊は薬師如来、これは弘法大師作とて昔仏向の浅間寶寺破却  
の際、帷子川へ流されたのが流れ着いてやはりこの川岸で拾われ、寺の  
本尊になったとの伝説もある。似た話だね」

次「よくもこう似たもんだ。よほど川に縁があつたんだ」

太「寺と隣合つて程ヶ谷小学校、此の学校は又区内最古という事だ。さあ  
此所から再び海道を出てあと戻りをして見よう」

次「警察署の右横から道を横切り、天徳院の前から神明の門前、それから  
土橋の付近へと来たんだね、此の間には昔、今井川が流れていたとい  
うではないか」

太「そうだ。其の今井川については区民が忘れてはならぬ大事な歴史があ  
るんだよ。というのはね、此の川は今から七八十年前までは保土ヶ谷の  
中之橋から往来を横切つて天徳院前を流れて帷子川に合していた。こう  
河身が屈曲した関係から二三日雨が降るとすぐ氾濫する始末、実に宿内  
の痛事であつた。ここで名主刈部清兵衛（悦甫といつた人）翁がこの  
難儀を察して再三幕府へ歎願したが、何せよ金が掛かるからおおいそれと  
承知しない。さりとて此の事成就せねば永久に水害を免れることが出  
来ぬ。そこで弘化四年頃から宿内の人々と相談して此の費用を積立る  
ことにした。一兩年のうちに百両余の金が出来たが、これでは到底四百  
両もある堀割が実現する筈はない。そこで中之橋を一度架替える金と  
二百両を二十年賦で貸して貰いたいと翁から再び願出る、なかなか許可  
せぬ、幕府の手を待っていては新川は堀られぬから、一切を宿内の費用  
でやろうと決心し、遂に嘉永六年から七年にかけて新川開鑿を成功した

のである。ところが今度は其の土のやり場に困ってしまった。翁が着眼したのは、ちようど品川沖に台場を築く時だったので、これを上土として二千坪ばかり買い上げてくれるよう嘆願したが、半分も取り切れない。そこで更に二千坪の土を無代献納、但し運賃だけ下渡しを願ひ、許されてこれが全部除去となつた。これなどは実に翁の偉いところで、三、五、六番の台場がみんな此の地の土で出来たといふべきだ。悦甫翁が此の宿につくした功勞は忘れてはなるまいと思ふ」

次「同感だ。今の人は、心持は刈部だが、悦甫からは一步も出ないなあ」

太「洒落たね。さあ又後戻りして、省線の保土ヶ谷駅へ行こう。東海道線の出来た時、駅名の文字を採用するにも一悶着あつたそうだ。又近年骨折つた結果、程を保土と改めたが、保土には確實なる史料が在るのだから、鉄道の方でもそう改めたのだ。さて海道に出る。神戸町上町七一一番地は昔の間屋場があつて、日々百人百疋の人足伝馬が継立てられた。日々名主一人年寄役八人帳付四人、書留役が二人馬指八人、これだけが宿から出張してやかましい制度であつたのだ。一寸した荷物の間違えがあつても村役不埒として十里四方追放などという嚴罰さえあつたなどは、寧ろ不思議な位、伝馬の概略の話は、家へ帰つてからゆっくりすることにしよう。関係の文章も少々は保存してあるから見せよう」

次「東海道の踏切の手前の小溝の傍に四本の石標が目につくが何だろう。寄つて見よう。ははあ道標だ。ここから左へとつて昔の金沢鎌倉道の分岐点、道筋の今井川に架けた橋が金沢橋、それから福聚寺前から北向地藏の高台を過ぎて石名坂を下り、蒔田橋を渡つて大岡方面へ通じた、とこういう訳になるね」

太「二番目の表面にある、【程ヶ谷の枝道曲れ梅の花】、其爪は面白いね、一句がすぐに道しるべになるとは風流だな」

次「僕もそんな風にやつてるよ。【真直ぐに行けよ柳の両便所】、これはどうだい」

太「汚いねどうも。さて其爪きせうという俳人  
 は本名を十寸見又次郎と云つて江戸吉  
 原引手茶屋ひきでじや椽屋の養子、俳人と云うよ  
 りも寧ろ河東節かとうかしで有名な人だよ。河東  
 節があれだけ盛んになったのは三代目  
 十寸見蘭州ますみらんしゅうのおかげだと云われるその  
 蘭州が此の其爪だ。この句を書いた  
 のが文化十二年正月十二日、死んだ  
 のが文政十一年正月十日だ」

次「其爪は素性が分からぬという事になつていたが、よく分かつたね」

太「僕が調べたのではない加山道之助君だ、一寸うけ売をしたのだよ。何しろ文化文政以後天保にかけては、当時の洒落れ者や風流雅人はみな、

吉原をはじめ花柳の巷を背景とし舞台として踊つてたのだ。そういう雰  
 囲気の中に生れた人々だから、諸所を遊び歩いて居たのだろう、句碑か  
 ら推しても杉田の全盛がしのばれる。「面白いなあ」

次「踏切を渡つて突あたりが旧本陣の軽部三郎氏の家だ。本陣起立に関係する文章も君の手許にあるなら見たい」

太「よしよし、あとで伝馬と一緒にして見せてあげる」

次「この本陣は由緒のうちでも一等に尊いことは屢々天皇、皇后御通輦に際しては御小休所にあてさせられた畏き蹟となつてることだ。邸内の井戸は御膳水として使用されたというからは是も聖蹟記念の一つと申すべ  
 きだ」

太「見給え線路を隔てて又寺があるぞ。真言宗の大仙寺だ、圓融帝の天祿年間(九七〇〜一〇一三)の創立、ここに軽部家の墓がある。木村担平、幸田南技など沢山有名な人々の墓に並んで、力持おでんの墓もある。一度詣つて行くか」  
 次「こうして再び元町方面を望んで来ると、昔の事がさながらに思い出さ



保土ヶ谷の道しるべ



れる。此の辺りだね旅屋が沢山軒を並べていて飯売女が盛にエロを發揮していたところというのは」

太「土地繁栄の最上策に遊び相手の宿と女とを設けるのは古今東西どこの国でも同じだが、事の善悪は別としてこうした結果が所の繁昌を来していることだけは事実なのだ。飯売女というのがいて脂粉の香を交えて客をもてなしたのが遊女の特権というようになり、慶長六年に東海道が始まって以来こんな女が出現して風儀を悪くする、五十九年後の万治二年に禁止したが、そうなると宿駅の淋しくなるのは当然の話、享保三年に禁止が解かれた。一戸に二人宛ならいと制限せられても、内にはおそらくもつと隠れていたに相違ない。文化年間には五十二軒の宿屋があったというから最少限度二人づつと見ても百人を越える。明治四年の調査では飯売女が百二十四、玉高七万一千百六十三、宿益高百五十圓、酌婦一人揚代金二朱とあった」

次「そうして暮すによい程ともかくも繁栄したんだね」

太「そうだと見える。明治十七年にこんな種類の女が廃されて遊郭が出来た。廃れてもちつとも惜むべきものではないが、只宿場の中心としての土地と、それを暗い方から助成した飯売女のようなものの介在を考えるとはやはりそこに昔の歴史が果敢なくくり払げられるのだ」

次「大分センチメンタルな話になったね。従ってこれらに関する文書なども君のところに蒐めてあるんだらう」

太「従って、とは可笑しい冒頭だが、あるよ。これもあとでお目にかけることにする」

次「この通りは昔遊女のあったところだ、其の名残りの家がまだ二三あるね。やあいつの間にか外川神社の入口へ来ている。定めし由々しい靈験譚もあるだろう。一つ願いますかな」

太「明治二年に、此の宿内に湯殿山の講中があったんだ、先達の清宮與一という男が出羽の三山、即ち月山羽黒湯殿の三山を巡拝した時、羽黒山

麓の外川仙人大権現の分霊を勧請して、自分の邸に祀つたのが抑もの始めで、子供の虫封じ、航海の安全、それらを祈る者が遠近から押しかけて来る、折から神仏混合分離の時代だったので、日本武尊を祭神と仰いで外川神社と改めた。境内に道祖神の祠があるが、昔は海道べりにあって旅人は勿論、鬼と取組むような雲助連中さえも、此の祠の前では鉢巻きをとって跪いたという話だ。五十三次中一番靈験のある道祖神と崇められたものだ」

次「とても巨きな草鞋が奉納されているもの、足が達者になるようにという祈願だろう。それに足疾のある者が祈って平癒になればそのお礼ということも加わるらしい」

太「報養というものは由来そうしたことが根源だ。ところで此の道祖神が大変に子供を好まれる。面白い話があるから簡単にそれを語って聞かせよう。ある時近所の子供が大勢出て来て、境内をあちこち飛廻る、神体を引っぱり出してから其の首玉へ縄などをかけてごろごろと転がしては遊んでいる。そこへお詣りに来た老婆が見付けていや吃驚したのしないのって、勿体ないことをするいたずら子供奴、罰が当たるのを知らぬかとはかりに散々に叱り飛ばして石像を起こしたり泥を払ったりもとの位置に直したりしてお託をした。さて老婆はその夜から非常に大熱だ。医者だ薬だと騒いでも一向本復しない。人に占を頼むと即ち道祖神の怒りにふれた為だとある。折角子供らと面白く楽しく遊んでいたところを、お節介にも止めだてして子供らを怒つたのが気に入らぬ。此の後ともに子供らを怒鳴ったりしたら早々命をとるからそう思えと来た。老婆はびつくり仰天、早速お詫びをする、あたりの子供を集めて菓子飴などの振舞をする、神も納得したと見えて間もなくけろりとよくなったという。それから子供が乱暴な事しても決して怪我をしないのは、偏に此の神の加護だとして、親達も安心して手放すするということだ」

次「神人和合の極致というのはそのことで実に面白い話だ。子供は人界

の神、神は神界の子供でもあろうから、へんに咎め立てすると憎まれる訳だ。全人類の世界もそこ迄いかなくちや嘘だよ」

太「などと君の理想論を一言聞いてると僕もだんだん偉くなるような気がする。それはそうと此の辺りだね一里塚のあった所は」

次「そうだ、外川仙人の前榎木茶屋の所にあつたのだが、勿論今は跡方もないね」

太「往還の史蹟としては見過せぬものだ、

一里塚の事は「箕輪筆記」永禄四年の條に書かれてあるところを見ると、

其れ以前から制度のあつたことは確かだ、東海、東山、中仙等の街道に一里塚を築かせたのは、家康の発案で慶長

九年二月であつた。菅笠に草鞋履きの道中姿を思い出させるよ。話に味が

入つてる内に海道名残の並木へ来たぜ。全くいいなあ。此所へ来ると、北斎や

広重の絵に魂のあつたことが分る。然し最近では並木を少々ならず邪魔もの扱いにして、やれ道路改修のやれ地目変換のと目の前の小利をふりかざ

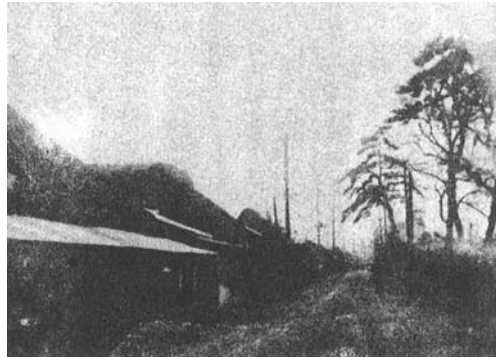
して、歴史に古いこうしした並木を惜げもなく伐採してしまふ風になつて来たから、実に残念な話だ。心ある土地では官民とも一致してこんな並

木があれば、たとえ五六本でも保存に腐心している。ここでもどうかして何時迄もこの尊い遺物を保護し保存するように努められたいもんだ。」

次「全く同感だ。古典も風味も斧を入れてどんどん除去してしまい、其のあとへ電柱とペンキと硝子とがのさばると日本の面影はどこへ行くか、

是れを憤慨しない奴があるなら、国史を棄てると同罪だ。郷土の人々は

結束して此の問題を考えねばなるまい。郷土から延いては国の緊要な事柄になるからね」



昔ながらの保土ヶ谷

太「すこし憤慨したら足が早くなつて、君には又かと言われるだろうが、それ向うの右側の小高い処に大櫓の茂つて見えるのが日蓮宗の妙秀山樹源寺だよ。此の大櫓があるから樹源という寺号も出た位、樹齡七百年といわれる。話するうちに来てしまった。よく見てくれ給え」

次「成る程此奴は巨きいね。いや大したもんだ。所謂神木の部に属するもんだね。何か此の樹に伝説がありそうなものじゃないか」

太「勿論大有りさ。日健上人という住僧は此の寺の十一世に座つた人だが、ある年大病で寝ていると夜中此の

樹の空洞に棲む白蛇が、美しい天女のような姿の女になつてきた。

自分は蛇地獄に墜ちたものだが、朝夕法華の妙典を耳にしたのでも

う成仏する因も芽して来た。我を源龍大善神として祀りくれるなら、

お前の病気を即座に癒してやろうというお告げだ。覚めて見るとこれ

は夢中の話、そこで早速此の洞穴に小さな祠を造つて祈ると、病も立ちどころに平癒する、それから斯うしてしめ縄を張り繞らして居るのは。面白いだらう」

次「うん愉快だね、寺の縁起も古い事を言つてるからね」

太「そう寛永年中に軽部吉重という人の室が此の宗門に帰依して妙秀と

いつたので山号の名となつたが、尤も此の樹の傍に昔古真言の医王寺と

いうのがあつた跡なんで、そこへ寺を建てて日了上人を迎え込み、櫓にちなんで今の樹源寺が出現したという話だ。そうして此の櫓は横浜の名

木中に指定されて保護木になつている」

次「この辺りの両側は昔のまんまの気分がする。屋根は草ぶき、家棟の

造作も一寸した材木のあしらい方も、東海道の脚當時の匂があつてたま



樹源寺の大櫓

らないね」

太「元町から右へ登るところ、これが有名な権太坂だ。今はそんな感じもないけれど、昔なら藤沢、戸塚から上下の客がここへ来ると相應に疲れしてしまう。お茶を一杯欲しいなあと思う距離に此の坂があるんで、いわば保土ヶ谷はあの難所があるんで繁昌したともいえようと思う」

次「自然と人生の歴史は一寸してもそんな所が面白いな、そして年中賑わったのかい」

太「毎年四月の二十九日から九月の片瀬の御会式迄の間が一番賑ったと云う事だ。それから大山詣で、富士登山、片瀬まいりなどの時は別して混む、昔はここに七八軒の茶屋があつて例の留女が四五人から七八人位ずついたという、其の女どもは揃いの派手な着物に赤いたすき、鹿子絞りの前垂、銀杏返しとか島田とかに髪を結上げて白粉をこつてり塗ろうという風情、これが毎日五六十人も一斉に出て来てペチャペチャやろうという、その客を呼ぶ声が面白い、団子がよければコロガリます、豆がよければハジケます。章魚がよければ吸いつきます。なんと云うのだ。花より団子の人もあれば団子より花がいいとて巫山戯て通る客もある。器量よりは力のある女の方が給金がかつたというがその理由が君分かるかい」

次「おっと皆までいい給うな。其の位の事は想像もつきさ。そうして見ると世の中は実際変化したね。不思議な位だ」

太「坂の名の由来を聞くとこうだ。ある旅人が丁度そこに居た老人に此の坂を尋ねたところ、耳の遠い老人自分の名を問はれたと思つて権左と答えた。それが訛つて権太坂となつたからほんとうは権左坂なんだとある。何だが拵え事の様だがまあ珍談というからそうして置こうよ」

次「感嘆之を久しうしているうちにととう武蔵相模の国境、著名な境木へ来たね。昔の広重などの風景画と比べると今は流石に寂しいもんだな。どうだいいれに地藏堂が、話相手を欲しそうに建つてるじゃないか。一

ぶくやろう」

太「あの地藏堂の手前の右側の家ね、あれが若林喜助氏の邸だ。昔は境木の立場でこんな狭い道を上下するのだからどんなに繁昌したろうか一寸想像さえつかぬ位だ。若林家は明治天皇御東幸の砌には御小休所に



境木の地藏尊

充てられた光栄を有して居る。地藏堂も汽車の開通するまでは実によくお詣り客があつたという。それが世の中と逆比例して人足が絶え、それに関東大震災で打倒され、見るかげもなく荒廃したのを、こうして奇特な信心家の力で再建され、時に慰め顔に和讃などを聞かせているという状態だとある」

次「神仏にも降替興廢があること人間と同じだから仕方があるまい。一体此の地藏さんは何処から来たのかしら」

太「はつきり年代は分らぬが、何でも昔由比ヶ浜へゆり上げられたというから海中出現なんだろう。五尺ほどの石の地藏だからどうも運搬しにくい。何十年も経過してから今度は腰越の海辺へ表われた。ある夜漁夫の夢にこの地藏が告げているには、俺は江戸へ行きたいと考えてるから車へ乗せて連れて行って貰いたい、然しもし其の車が動かずなったらそこへ置いてくれ、その代り此の海にはいつも大漁のあるように守護してやろうとね」

次「石の地藏もなかなか固い交換条件を提出したもんだね」

太「やがてお告げの通り牛車へ乗せてゆらゆら動き出して此所まで来ると、さあどうしても進まない。約束どおり堂を結んで安置したということになると、江戸が好きなら江戸っ子が願つら一番よく叶えてくれるだろう

と、そこは江戸っ子慾も任侠も手伝つて参詣に群集した。この地藏尊のために江戸人が浜へ流れ込んだ時代もあったんだから忘れちゃならないだろう。知っているだろう有名な野毛山の時鐘、明治元年から大正の震災迄鳴り響いていたあの鐘も、江戸吉原講中から寄進した此の地藏さまのものだったのだ」

次「伝説といえば境木の山頂には血桜の仇討というのがあったね。それまで聞いては日が暮れる。さあ又保土ヶ谷指して引返すとしようや。登りよりは下るが楽の権太坂、一体境木辺りの高地は脚氣病にいいと云って来るから健康地には相違ないが、空気が清澄な為かそれとも又別に不思議なことでもあるのか」

太「そこは天然の神秘だから、いわば万人が経験してよいとしたと見る方がよからう。高燥で温湿で適當で、空気が綺麗なれば申分があるまい。ああ別荘をここに欲しいな」

次「江戸名所図会を見るとここで上杉謙信が戦つたとあるし、十三塚もあつて是に関連するようにも考えられるが、果して謙信がここへ来たろうかしら。」

太「さあ上杉も謙信でない上杉家かも知れんぞ。本陣脇の市営バスの停留所から新設二十二米の大道を、こうして一町程来ると左側の谷戸から見上げるばかりの急坂があるだろう。久保山方面によつたあの松林の中に、お鍋稻荷というのが祀られた面白い伝説がある」

次「稻荷の名前もいろいろ奇抜なのがあるが、蓋しおなべなんて云うのは下女と共通しての名らしくて面白いね」

太「なかなかエロ味もあればグロ味があるから話して見よう。話しはざつと百年程前に遡る。この宿の音次郎という者が隣の永田村へ行く途中、野狐が一匹昼寝してのを見付けた。誰にもあること音次郎からかい半分石を投げると、うまく狐の左足へ中つたから吃驚して穴へ逃込んだ。此の音次郎馴染の女が宿内の新屋彦四郎抱えなべというのであつたが、

此の狐が件のなべ女に化けて音次郎の側を離れない、それが音次郎の目にはすっかり見えて余人には見えないのだ。果は氣狂のようになって来る。女の容色で左足をおられた怨を諄々という、穴の上に祠を建てて稲荷に祀ってくれ、今あるものを修復してもよいなど少々讓歩したことまで言う。聞く人はびつくりしてすぐさま申出のようにする。音次郎の病氣は平癒する。諸人が信心する。参詣者が来る。というような話なのだ。」

次「そこで我々も感心する。という訳かね。おやバス停留所の裏から絃歌が聞こえて来るぞ。あああの辺りが保土ヶ谷の妓楼のあるところなんだね」

太「裏山の岩間上町に村社八幡神社があつて、此の境内から菊水観音出現という物語もある」

次「此戸部方面へ電車線に沿うて進むこと一町余り、右へ屈る坂路は金沢道だと分つたが、左の中腹のところにも又お寺が見えるじゃないか」

太「又とはへんな云い草だね。臨済宗の岩間山福聚寺さ、建武二年の創建とあるから南北朝時代初期のもんだ。むかしは字道上辺りにあつたのを後年ここに移したとある。境内には保土ヶ谷の名物男だつた大親分の半鐘兼の墓もある」

太「この電車線路の向う側は、区制施行の時に中区に編入されて了つたのだから、此の線路に沿うている安楽寺や圓福寺、杉山神社などはこちらの領分でなくなつたが、保土ヶ谷は実家だ、親類廻りのつもりで一寸お詣りしようよ」

次「モチだ。茲には面白い伝説があるというではないか」

次「あるよ、さつき話した菊水観音出現の夢物語り、これは安楽寺の住僧の事だ。圓福寺には筍地蔵、面白い名だろう。杉山神社にある素晴らしい燈籠の一对、これが伊勢大神宮となつて居る怪偉。あるね。だがこんな事を話していると日が暮れてしまうから、後で話をしよう。横浜叢書の「伝説と口碑」に書かなかつたのがあるから、それと一所に話そ



うよ」

次「福聚寺の門前から十数間上つて御所台の井戸というのは、ああこれだね。尼將軍政子がここでお化粧した清水というのは面白い話だね。水心あらば昔を語れ秋の風だ」

太「尼將軍の話ばかりか明治天皇御小休の時、この水が御膳水になったことがあるよ。せめて此の話でもしてくれろといいがね。誘う水あらばという風には行かんかなあ」

次「平地になった所の正面に石地藏があるね。今日はどうもお寺と石地藏が目につく日だ」

太「ここは永田方面へ下る分岐点だが、これが北向地藏と云つてね、やはり伝説の持主でいらつしやる。迷う人を救うたことはどこの地藏談とも似ているのだが、只江戸の方角、即ち北を向いて居るので人呼んで北向地藏というた。修繕などの場合少しでも位置が変更すると、必ず正しく北を向くというが、今でも月の二十四日は念仏構仲間が此地蔵のもとに集るのが慣習となつてる」

次「台座の下がつまり道しるべになっているんだね。考えたもんだね」

太「そこが所謂ちまたのお地藏さまとしての信仰を繋ぐ一つの方便でもあつたのだ」

太「久保町の杉山神社前から踏切りを越えて区役所に一寸顔を出して、再び星川方面へ出かけて見よう」

太「神戸下町の神明社横を星川へ行く途中にうつる近代の壯観は、仕方がないから保土ヶ谷の名物とでもして置こうか、大日本麦酒の保土ヶ谷工場、浅野カーリット、曹達会社、星川染色工場、メリヤス工場、其の外大小の工場から吐出す煙突の黒煙は、実に天日も曇るばかり、見給え此の広場に積累ねられた硝子壘、無風流なものでもこうして幾百万本と集められると一寸芸術的になるね」

次「でもな感傷的作品よりはずつといい。星川町だ。左方何十段の石段の

上に、又お寺が見えるなあ」

太「又お寺か、はゝゝゝ。あれは日蓮宗の光栄山法性寺、元和二年に法性院日在上人が開山となり、芝生村の齋藤忠兵衛が開基したという寺だ。寺実には、日蓮龍ノ口法難の時、牡丹餅を皿に盛るとまなくて鍋蓋のままを進めた老婆のあったことは有名な物語だが、これに書いたのが鍋蓋本尊、享和三年に江戸の吉原江戸町山本町てつ女がこの寺へ寄進したもので其の外比企能員書写という紺地金泥の法華経八品もある。それから此の星川には曲題目というて世間稀に聞くものが今尚残っている。お題目に節をつけ、太鼓の鳴物入で躍るように仕組んであるが、根本はその踊念仏と同じものなのだろう。どうして出来たかについても亦いろいろの解説があるようだ」

次「此の寺で思い出したことがある。本堂の欄間には元鎌倉法華堂にあった彫刻を箆めてあったが、それを古物商が外国人へ売込むべく弁天通の商店へ持出したのを、亀樂煎餅の長谷川喜樂翁が買取って寄進したという話がある。世の中には、心掛の善悪でこれほどちがう人があるからな」

太「まあそんなもんだな。此の裏山には氏神の杉山神社があり、又其の付近には加賀屋敷址とか、かんかん井戸とか、お内匠様とかいう遺蹟がある。時間がある時に訪ねることにしよう」

次「やあ星川小学校で子供らが遊戯してるぜ。ああ嬉しそうだなあ。俺ももう一度あんな時代に返りたいな。学校の旧校地が左の高台の広場だったと聞いている」

太「それともう一つはそこが浅間寶寺の旧跡でもあるのだ。武蔵風土記にも享保頃に沢山の枯骨を掘出したのでその供養に石地蔵を建立したと書いてある。その石地蔵は、学校がここに建築される時、和田村の眞福寺に移されて今も門前にある筈だ。丘の上からは石器時代の遺物も相応に出るので、考古学者間にも評判になつてゐる所だ」

次「二三町来て仏向町へ這入つたら、ほら又左にお寺が見え出したぞ」

太「あれが曹洞宗の仏向山正福院だ。これは永享<sup>えいきやう</sup>以前の創建で、風土記を見ると此の寺の先住<sup>せんじゆう</sup>で堯室という僧が、初めて北条家に謁見<sup>えつけん</sup>した時、希望して仏向山の山号を許して貰ったということが書いてある。境内には白山<sup>はくさん</sup>妙理大権現外記薩埵<sup>ざつた</sup> というのがあって、頗<sup>すこぶ</sup>る付の靈驗談<sup>れいげんだん</sup>が残っているからこれを少し歩きながら語って見よう」

次「物あれば必ず名あり、名あれば必ず伝へありか、随分とご苦勞千萬な話だ。保土ヶ谷の名誉にかけてよつく承わりましょう」

太「何もそんなに力むには及ばないよ。子供が百日咳に罹<sup>かか</sup>って苦しむ時、この外記薩埵<sup>ざつた</sup>に祈るとよく癒<sup>い</sup>る、その御礼として赤い頭巾を奉納する。これだけの話だが難病の百日咳だけに親達は皆參詣に來るらしい。して見ると此の外記という人が、呼吸器の病気で倒れたのでこういう大願で遺<sup>のこ</sup>したともいふべきだろうと思う。寺から出す信者心得の事という書付を見るとこう記してある。此の護符は当院外記薩埵<sup>ざつた</sup>の大願力<sup>だいがんりき</sup>に依<sup>よ</sup>て布施するものにして小兒百日咳平癒<sup>れいふ</sup>の靈符<sup>れいふ</sup>なり、夙<sup>はや</sup>く進めて薩埵<sup>ざつた</sup>の願力<sup>がんりき</sup>に浴<sup>あ</sup>みせられんことを

御名號 相鏡妙圓外記薩埵<sup>げきせうじつた</sup>

用い方は包みある符は朝一日一度清淨水の初穂にて飲むべし護符<sup>ごふ</sup>を用うる間は信心を専念にし加持<sup>かじ</sup>祈禱<sup>きとう</sup>中は両親かわり勉めて精進すべし心願成就の方は赤き頭巾を奉納せられよ

武州橘樹郡保土ヶ谷町仏向 正福禪院

とね」

次「自分の死後に至る迄人の苦難を救済せんとする。その念力や賞むべく崇むべしだね。そこで拙詠<sup>せつえい</sup>を献じよう。

百日の苦難さつたと拝むのも、

はるげき人の正福ぞかし

太「面白いね、そこで我等もここを去ったとして、仏向町の鎮守は杉山社

に参拜、それから水道浄水場の方へ向つて坂本町へ出よう」

次「浄水場への登り口、左の林の方に見える建物は」

太「あれは高根大権現たかねだいこんげんの古い社だ。昔は下の病しよに験しるしがあるというので保土ヶ谷宿の飯売女めしうりおんなどもが引切りひつきりなしに詣つたという話だ。大願が成就すると鏡を納める例があつたなどは土地だけに愉快だねえ。石造の陽物ようぶつが御身体ごんていだからいわばほんとの道陸神どうりくじんから転じた幸さいの神だつたのだ。禁止せられる前に盗み出した奴があるそうだ」

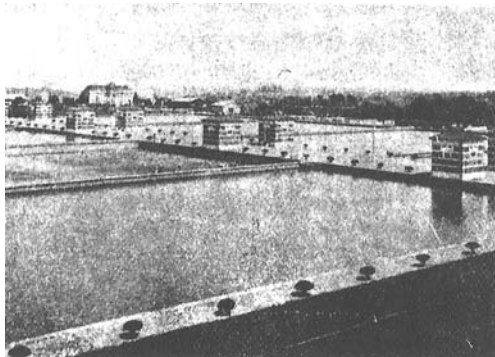
次「そうすることも大願成就であつたかも知れぬ。坂を数町やれやれと登つたら見え出したのが西谷の浄水場だ。満々と湛たえたこの水、此の水こそは市民の糧かてになるものなのだ。ああ雄渾ゆうこんな見ものの一といつてよいだろう」

太「さあ元の道を帰つて八王子往還へ出よう。それこれが神中鉄道上屋川駅の前だ」

次「そうすると正面の山は源頼朝が茶を煮たという釜檀山かまんだんだろう」

太「その通りだ。石を重ねた上の石に丸い穴があり、それが茶を煮た釜檀石だというが、富士の裾野に狩りした時、わざわざ此所こゝ迄まで来て茶を煮たかどうか怪しい伝説のようにも聞こえる。或は又これも石器時代の遺蹟なのかも知れぬ。只昔から此の石に付着する苔こけを剥はして飲むと、咳病や風邪によいとされた。癒いれば竹筒へ酒を入れて捧げる。今ではビール壺などに茶を入れて備えている」

次「いづれそんな事だろうと思つていた。そして其の石は今どうなつてる」  
太「特殊な所の人が自分の蔵へ大切に保存しているそうだよ。当時の茶の



西谷浄水場

湯にした井戸が附近の民家にあつて、旱天かんてんにも決して減水しないとも伝えられて居る。井戸だけは深くてよい水らしい話だ」

次「上星川町の杉山社を拜んで左へ入ると又寺が出た」

太「寺が出たは可笑しいな、我々が来たんだよ。これが曹洞の薬王山東光寺で、正福院の堯室和尚がここをも開いて居る。開山は小机雲松院廿八世明岩和尚とあるがその年代は明白でない。本尊の薬師如来は伝行基の力作、さてこの寺でみんなが驚くものがある。どうだこれが有名な生木なまきの山門だ」



東光寺のつげの門

次「いやあ成る程、つげが二本で互に門の形を作つてる、実に見事なものだよ」

太「洒落れてはいけない。東光寺を出て数町来ると、ほら又右の方に曹洞宗の正観寺が又出て来たぞ」

次「人の真似をしちや駄目だ。君は説明役の方だから」

太「ここには曹洞が相当ある。なに語呂合せだつて、まあまあこの正観寺は小田原北條の臣中田藤左衛門という人父加賀守の菩提ぼだいとして文祿ぶんろく三年(一九四)に小庵しょうあんを営み、随流院ずいりゅういんの六世を開山に迎えて一寺としたもので、境内の弁才天には又伝説がある。裏山の崖が崩れてお宮諸共もろともに土中に埋もり、穴の位置が分らないので四十年余もその儘ままにしたとは、相手がいくら温おど和なしい弁天様でも呑気のんきな話だ。大正十五年(一九二六)の正月二十四日、寺の大檀那おおだんな中田という人のところへ村の衆二三人がやって来て、弁天さまの穴を掘つてもよいかと云う話だ。段々其の訳を聞いて見ると、此の三人の夢に三度も大蛇が来て、自分は弁天だが穴が塞がって困っているから

早く掘つて呉れる頼むのです。それが昨年の暮から今までにあつた事ですとの話なので、それでは近所の人々と力を協せて漸々穴を掘出した。それから夢にも来ない。よい事が続く、お詣りの人が殖える。それが縁となつて震災の時破壊されたまままであつた寺が再建する。ところが弁天様が荒れて困るとの苦情が附近から出た。見ると檀家のどの家へも大蛇が廻つて行つたような跡がある。これは定めし栖居が無い為であるうとて、金を出し合つて本堂を建てた。本堂が出来上がつてからは出現しなかつたということだ」

次「ふうむ、何だか弁天様が大蛇と結託して宣伝してるようにも聞こえるが、何やらも信心からとあるから、奇特な信仰家には全く以て觀面な話と受けられることだろう。何だ、又寺か、妙福寺とあるから日蓮宗だな。門の前にある此の題目碑は素晴らしく大きいなあ。サア川嶋の随流院と村社杉山社の参拝がもう済んだから和田町へ行くことにしよう。君、大分疲れたね」

太「疲れたな。然し面白いからさして苦にならない。上屋川駅前から二丁余り山の出鼻の往来に一基の石碑が突立ているのが見えるだろう。あれは昔、八王子往還和田村山中行旅の苦難を察して、これを援わん為に新道を開鑿した時の記念碑だぜ」

次「それは有難い記念だね。やあ又寺があるぞ」

太「眞福寺と称するもの、これは大照山不動院といつて和田義盛の建立とある。境内にはこの義盛に因縁のある和田稻荷というのが祀られてある」

次「左衛門尉ともある荒武者が、莫迦に仏心を出したもんだな」

太「熊谷が蓮生坊になる時代だ。義盛だつて仏心のない事はなかるうさ。何でも十一面觀世音が夢枕に立つて、此の地が稻荷神霊地だと教えて、隨喜の涙を流して建立した寺だとあつた。什宝の中には頼朝寄進という觀音像などもあつた筈だ」

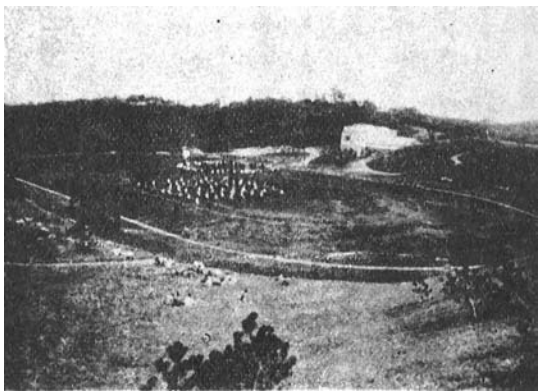
次「寺を出ると間もなく常盤公園の入口だ。故岡野欣之助氏が公衆の為に

巨費を投じて施設したところ、九千坪の広表ひろはらに梅と桜が絵のように植えられて居るが、秋の紅葉も見廻のがすことは出来ない。その隣が十六万坪を有する東洋一といはれるゴルフの競技場だよ、これはたしか保土ヶ谷カントリークラブの経営だった。遠望だけしよう」

太「まだあるよ、カタビラ葡萄園ぶどうえんさ、一万坪以上の広大な園に葡萄が一杯なっている。素ばらしいもんだよ」

次「そうそう国産奨励の世の中だ。此の園から出している皇国ブドウ酒の売れるのも当たり前だよ。宮内省だの大学だのに出しているところこの主人が威張って居たつけ」

太「それから横浜市児童遊園地が此の区内にあるのを忘れてはならぬ。こんな施設は他の都市ではまだ見ないもので、面積三万七千八百坪、児童専用のもは至れり尽せりの設備だ、園中には本市出身の戦病死者せんびょうしやの霊を祀る忠魂碑ちゆうこんなどもある。こうし



横浜市児童遊園地

た施設がいかに国家的意義を有するかは説明する要もあるまいと思う」

次「その通りだ。いや随分と歩き廻ってそろそろ秋の日も西山に傾こうとする、我等の腹は北山へ傾いた。見残したところは後日に譲って、さあそろりそろりと戻りましょうよ。

「さらば〜」

次「いづれもさらば〜」